(一社)日本計画行政学会関西支部 2022 年度研究大会

シンポジウム「コロナ後のまちづくりと自治体経営」

③ 参加者との意見交換

日 時:2022 年 10 月 29 日(土) 16:00-16:30

司会（竹下幹事）　では、ここからは、フロアの皆様からのご質問の時間としたいと思います。

藤原（追手門学院大学教授）　千代松様、また松本様お話ありがとうございました。大変情報量の多いお話で、勉強なるなと思いながらメモ取っておりました。

２点お伺いしたいと思います。１つは、市長をされたときに何年ぐらい先を見て、仕事をされておられたかということなんですけれども、こちら計画行政学会という計画、プランニングについて研究する学会でございますが、市長の仕事っていうのはたくさんの、自治体は 3,000 ぐらいの業務があるとも聞きますが、そのうち、注目されるのはいくつかの事業であったりするのかなと思うところです。総合計画とかはかなり満遍なく書くところが多いかと思うんですけれども、市長をお務めされるときに何年ぐらい先で、かつ、やはり、注力するところと、絶対にどこの市でもやっているところと、ちょっとエッジをきかせるというところがあると思うんですが、そのあたりの区別をどういう風に意識づけされておられるか、おられたかというところ、それが自治体の競争力っていう風に、最終的には今後レッドオーシャンのふるさと納税の市場の中でもなるのかなと思いまして、何年ぐらいの先を見て仕事されておって、ある１点、またはいくつかの施策を沢山の業務の中でどういうふうに力具合をつけておられるのかというのが、１点目でございます。

そして２点目は、職員をどう見つけてくるかというところなんですけれども、先ほどお話で、今 20 名ぐらいの職員様が泉佐野市ではふるさと納税に関わっておられるということで、ここで必要とされる能力というのは例えば自治体の人事課とか財政課で必要とされる能力とは異なる、ある種なんて言うんでしょうか、商いというか、商業化というか、ビジネス的なセンスが要るかと思います。そういうような職員を中途採用するのか、１から育てていくのか、何らかの形で抜擢する必要があると思います。あと当然人事異動で自治体は数年間で異動していくかと思います。それではノウハウが失われるようなところもあると思いますので、その点のある種専門人材というか、そういう方をどのように、適材適所に配置しているのか。以上、２点、２番目が人材育成の問題点、１点目がマネジメントの計画についてお伺いできたらと思います。可能な範囲で結構ですので、よろしくお願いします。

千代松　それでは、最初のマネジメント等の質問でございますけれども、正確な答えになるかどうかっていうところも正直ありますが、やはり何年先を見据えるかっていうのは、その分野分野の仕事によってもやっぱり違うという風に私は思っております。企業誘致とかでしたら、やはり計画をして、実際に測量入って、設計に入って、土地を造成して、工業団地ができて、そこに企業が張りついてくれるというと、やっぱり５年から６年ぐらいのスパンにもなってきます。そして企業がオープンして操業してくれるのはやっぱ 10 年ぐらいかかるような話にもな

ってきますし、例えば関西国際空港でございましたら、まだ関空は全体構想が実現しておりませんので、そういう話でしたら、まだまだ 20 年、30 年先の長い話にもなってくるという風に思います。端的に申し上げますとふるさと納税制度でしたら最高裁判所の裁判に勝てなかったら明日も知れない話でございました。その分野分野その業務業務によって、自分なりにこれは何年仕事だな、これ何年かかるな、なんていうのをそれは見据えて見極めた上で、取りかかっております。

けれども、やっぱり行政職の方と、どうしても政治家でございますので、そのタイムラグというのは、正直行政職の方やったら、いざ失敗のないように進めていきたいということで時間的な余裕も結構取ろうとするんですけども、住民要望が強い案件であったりすると、かなり早めたりさせていただきます。

議会のやり方は違うと思うんですけれども、泉佐野市議会の場合は３ヶ月に１回の定例議会で、補正予算のためだけに臨時議会を開催していただくというようなところでは、なかなかそれは馴染まない、今まで馴染んでなかったところもありますので、議会開会中に補正予算を２回上程したりして、できるだけ早く進めるというところではそういう努力もするような分野もございますし、関空の話でしたらまだまだ 20 年、30 年先というような、ロングスパンで考えていかないといけないかなというところもありますので、なかなか１つのことで何年先を見据えてというのは、申し上げにくいところが正直でございます。

あと人材育成につきましては、おっしゃる通りふるさと納税の職員は、人事であったり財政の職員とは全く違うやっぱり要素でですね、日々の業務に取りかからなければならないという風に思っております。そういう人材をどこで見つけてきたのかというところでありますけれども、これは、千代松だからというところもあるんで、なかなか一般的な話ではないかもしれませんけども、私も市議会議員 11 年間、26 歳からやらしていただいて、市議会議員時代から若手の職員との交流をずっと続けておりましたので、自分が市長になったときは、この人はこのことに向いてるなっていうことで、ふるさと納税でトップで今やっている人とかは、僕の１歳年上のプロパーの職員なんですけども、非常に若い時から選挙管理委員会の職員とかやってたときは、どれだけ開票時間を短くできるかっていうことにすごい力を入れたりとか、あと納税課におったときはどれだけ徴収率を引き上げることができるかどうか、そういうことにやたら燃えていた人間だったので、そういう人間をふるさと納税にあてたらどれだけ寄付集めてこれるかというところにも、かなりやってくれるんじゃないのかと思ったら、案の定それがうまくいったことがあったと。市議会議員の頃からよく職員と意見交換とか交流をしながら、適材適所を何とか自分なりに見極めてきたっていうところも正直あります。

松本　補足的になりますが、その何年後を見据えるかということで言うと、千代松市長さんおっしゃったように分野によって違うということと、あとは実際にはいろんな仕事があって市民に見えない仕事で大事なロングスパンの仕事があったりもしますので、そういったものを、しっかりとチェックしながらやっていくということがあります。

例えば、システムの更新で言うと、一定の年数ごとに変わっていくわけなんですけれども、そういったものを、タイミングをしっかりと把握しながら、次はこういう更新がいつ頃あるなというときに、それと併せて何をやるかとか、その時に仕事を業務改善しようかとか、そういう市民から見えないところで、色々と気を配る仕事にも市長の面白さがあったなと思っています。

それから、私も議員を６年やる中で、目をつけていた職員を活用するというところはやりました。もう１つは、任期付職員制度の活用を図りまして、先ほどの千代松さんも任期付をふるさと納税に取り入れてという話をされていましたが、まず３年プラス２年できるという制度ですけれども、割合、中途の方を採用しやすいポジションです。そこにも積極的に人を入れて、そして、もともとのプロパーと融合の中で、新しい価値を見いだすということを行ってきました。

藤原　市会議員の時から見つけた方が、今、中心となって仕事をされておられるなどは大変興味深いことがわかりました。ありがとうございました。

梅村（大阪経済大学教授）　今日は千代松市長が来られるということで、以前から聞いてみたかったことがあって、泉佐野市さんがやっぱ国を相手に訴訟したっていうのは非常にセンセーショナルで、やってくれたかという思いを持っております。僕も元職員でございますので。実はその時に多くの市民の方

はどのようなお声を出されたのか、ちょっと現役の市長さんに聞くのはきついかもしれないんですが、もしよかったら教えていただければと思います。

千代松　私自身に面と向かって批判されるような市民の方っていうのはなかなかおられないんですけども、そういう中でテレビのインタビューでは、ふるさと納税でここまでやって非常にダーティーなイメージがつきまとうとか、もうそろそろ国と仲直りしてもいいようなということをインタビューを受けて言っておられる市民の方はテレビで拝見させていただいたことあるんですけども、私に面と向かってそんなこと言うような方はなかなかおられませんでしたので、ある程度、私に頑張れというように後押し、背中押していただける市民の方々が、やはり多くおられたという風に思っております。

追い出されたのが令和元年の６月で、その前に平成 31 年の４月の統一地方選挙がございまして、私３期目の選挙で前回と全く同じ相手だったんですけれども、前回を 4,000 票ぐらい上回るような得票数をいただけましたので、国と戦ってる最中にもかかわらず、それだけの得票数をいただけたということは、自分なりにですけども市民が力強く背中を押してくれているなという風に自分の思いとしては受けとめたところでございます。

梅村　やっぱり国を相手となりますと、総務省だけではなくいろんな各省庁といろんなことあったと思うんですけど、すごい決断されたなあと思っております。ありがとうございました。

鐘ケ江（立命館大学教授）　本日は面白い話を誠にありがとうございました。私、シミュレーションゲーミング学会の前の会長で、大阪のｅスポーツ研究会の座長もしてるんですが、まず最初に、ｅスポーツキャンプがなかなか好評で、日本全国の中でも、もうほぼ初めてと言ってもいいぐらいの開催ができたことについて、評価が我々の業界というか学会では非常に高いので、まずはお礼を申し上げたいと思うんです。

それでふるさと納税 3.0 について、次の 4.0 になっていくために、ｅスポーツを使った次の世代の育成、或いは文化、或いは新しい産業としての育成というものをうまく連携できるのではないかなと思って今日は聞いていたところです。というのは、こんなこと言うと堺の関係者に怒られるかもしれませんけれども、泉佐野市は今イメージとしては出島の状態です。ただ包摂的な社会を目指すためには、出島じゃなくて入り島になってるのかなと思いながら聞いていたんです。

何を言いたいかというと、現実の社会が非常に仮想化していて、クラウド型に、例えば、交流人口をふやすとかいっても、サブスクで、空き家を１つ１つでは意味がないので連携させたような業者が、サブスクで月１万円とか３万円とすると、４週間までは住めるとか使えるとか、なんかそういうことで、バラバラになっていたものをつないでサービスして、来る方々は色々なことをする。

出島っていうか入り島だと申し上げた理由は、ｅスポーツの大会を何かしようと思うときに、実際にはｅスポーツの大会は人が来るんですね。まだ今でも遅延があるんで会場アリーナとしては一緒の場所で戦うんですよ。その時に、ただそのあと配信したりとか或いはそれを見に来る人とか配信といっても解説つき配信ですね、ストーリーミングするストリーマーとか、色々な方が来るので、その利便性としてはりんくうタウン等は最も優れている場所。最近 LCC の飛行機も来やすくなって安くなって、ピーチだけではなくて他の会社、そういうことと連携して、外国人がぽっと来て一晩ゲームして、アジアであれば時差２時間程度ですから、大したことない。

そういうことをする。或いはそれを育てるためにふるさと納税 4.0、或いは一気に超えて、海外から寄付を募ると、もう特例で課税しないと。なんか新しい仮想世界と人材育成と次の産業とかを繋ぐようなことにうまく繋がると、ふるさと納税 4.0 とか、すでに普通のスポーツであればフルスポとか始まっているんですけれども、そういうことをさらに連携版でアドバンテージをうまくやっていただけるような可能性はあるのかなと思ってます。その辺は、まだｅスポーツとの連携というのは、これからなんでしょうかね。

千代松　ありがとうございます。非常に今のｅスポーツキャンプに対して、高い評価をいただきましてありがとうございました。今年の８月に３泊４日でりんくうタウンのオチアリーナという会場で、高校生を全国から 47 名ご参加をいただきまして、北は北海道から南は熊本まで全国からですね、高校生がりんくうタウンのホテルに泊まってもらいながら、ｅスポーツの合宿を行うというような取り組みでした。最終戦は５人１組だったと記憶しておりますけれど

も、合宿で知り合った中で、チーム分けされて即席のチームだったんですけれども、チームを組んでトーナメント戦って決勝戦を行ったということで、非常に同じチームだった中では色々な固い絆といいますか、新しい友情も生まれたと聞いておりますし、非常に盛り上がったイベント３日間、４日間であったという風にも聞いております。そしてあわせて相乗効果といたしまして、高校生たちには常に地元の食材を使った料理も食べていただいたということもありましたので、地域経済にもかなりの効果があったというような取り組みでありました。

先ほども少し申し上げさせていただいたんですけれども、次の構想といたしましては、すぐにできるできないかというところでは南海さんとの調整とかも必要になってくると思うんですけれども、ｅスポーツのプロチームの予備軍というのを、このりんくうタウンで養成していこうではないかというような取り組み、構想も考えております。実際にプロの方にお越しをいただいて指導受けてコーチをしてもらうとか、ドラフトみたいなんがあるんですかね、ｅスポーツにも、そういうような何かに選ばれるような選手を育てていきたいというようなことを聞いております。

そこの分野でさらにとなりますと泉佐野市が当初予定してた予算よりもかなり大きな額になってきますけれども、南海さんと色々協議していく中で、そういった部分にふるさと納税を活用していこうという話も実際ございます。南海電鉄さんが色々と企業のスポンサーさんとかにもお声を掛けていただいているような状況でもございまして、実際にｅスポーツとふるさと納税を絡めて、ｅスポーツのまちづくりをしていこうという取組は現在進行中ということでございまして、何とかこれをうまく行けるように私も進めて参りたいと考えております。

鐘ヶ江　ありがとうございました。多分南海の和田さんのとこだと思いますけれども、たくさん興味のある人達が、特に若い世代がいてですね、我々大学にいるので高校生がたくさん集まるってなると、色めきだつ入試関係の人達がたくさんいるんですけれども、それは冗談としてもかなり有望だし、人材を育成する。こんなこと言うと、泉佐野市内の高校生だけではないということになってしまうのかもしれませんけれども、そういう意味でも波及効果が大きいので、人材は地元に縛られるということはないと思いますので、ぜひ、皆さんで進めていただけると、もう本当に日本でやったもん勝ちというよりは、本当に必要なことをよくぞやっていただいたと思ってますので、今後ともよろしくお願いいたします。

高田（関西支部長）　１点だけお伺いしたいことがございます。今回の対談のテーマが「今後の自治体経営を考える」というテーマになってるんですけれども、それぞれの市長さんはやっぱり自分の自治体のところを中心に考えていくのは当たり前だと思うんですが、昔から広域連携というふうな考え方もある中で、なかなか広域で自治体が連携していくのって進んでいないなんていうのが、外から見てる中ではちょっと思っております。ただ、これから人口減少になってくるとそうも言ってられないところもあると思いますし、また、インバウンドの方に来ていただくってなるとやはり広域連携で進めていくところもあると思います。この辺りの広域連携のこれからのあり方というか、取り組み方というか、何かその辺でお考えお持ちでしたらご意見ちょうだいできればと思います。

千代松　私は常々議会でも発言してるんですけれども、究極の広域連携が、市町村合併だという風に言っております。泉佐野市でも、正直こんなことがございました。泉州南広域消防組合という３市３町の消防組合がございまして、この各市町の負担金の見直しっていうところで、２年にかけて、財政部局の人間が 20 回以上の会議を開いて、負担金の調整をしました。やっぱりどこの自治体も負担金は少ない方がいいですし、多く出したくないっていう現実がございますけれども、こんなの一緒の自治体だと無駄な時間過ごさんでもいいのになと、正直、思いました。広域連携にやっぱり限界がありますし、やはり市町村合併がやはり究極の行財政改革でもあるなという風にも思っております。

私は平成の大合併の時には泉州南の方であった合併協議会の一員でもございまして、平成の大合併のときやったら合併反対派がいつも言っていたのが役所が遠くなるとか、そんなこと言ってましたけども、コロナ禍の中でやっぱりデジタル化も進んで、マイナンバーカードとか出てきた中では、お役所なんてどこにあってもいいんじゃないの、リモート会議とかも確立してきましたし。そういった面ではそういったデメリット部分はもうすでに解消されてるんですけども、ただ全国的に平成の大合併のようなときみたいに、アメとムチじゃないですけども、合併特

例債と地方交付税の削減みたいな論議は全然ないですから、全国的な盛り上がりがない中ではあります。けれども、泉佐野市といたしましてはこういう状況でも常々合併をしていただける、合併協議についていただけるというような自治体がいていただいたら、それこそ飛び地であっても協議を進めたいなという風に近隣の市町の町長さんや市長さんにも言ってるんですけども、なかなかどこも相手をしていただけなくて、やっぱ合併は結婚と一緒で相手がいなかったらできないものでございますので。私の考え方は、とりあえず広域連携も重要かもしれませんけれども、やっぱり限界がございますので、こういう時代がやってきた中では、もう少し基礎的自治体の再編っていう議論が湧き上がってきたらいいなっていう考えを持っております。

松本　ちょっとスケールの小さい話をさせていただきますが、施設の共有化とか共同利用みたいなことを進めていくことが必要だと思っていて、私の場合は就任していた最後の仕事が隣の朝霞市さんとのごみ処理施設の一体化でした。設計まで朝霞市さんは行っていましたが、色々と単価の高騰とかあって困っているときに、結果的に一緒にやることができました。

最大の課題が、実は市民の意識であります。ごみ処理施設でいうと、何でうちのまちが朝霞のゴミを焼くんだというそういう市民が必ず出てくるわけですね。逆に言うと、利便施設であると、例えば図書館とかは朝霞が非常にいいので市民は使うんですけれど、それでいいじゃないかって私話しをしてたんですけど、やっぱり自前の図書館が欲しいという。これは、どれも市民の意識の問題であります。そして、それでは持たないんだよという意識の共有を市民でしっかりやっていくのとあわせて、やっぱりその首長同士、個性が強いので、なかなか折り合うことが難しいところあるんですけれど、それを乗り越えてやっていく必要があって、手間がかかります。なので、確かに一体化した方が効率がいい地域というのが一杯残っていますので、そこではそういった視点も必要になってくるのかなと思っています。

司会　ありがとうございます。最後に私から、千代松様が考える泉佐野市のフューチャーデザインといいますか、未来の泉佐野市の姿というのはどんな形で今描いておられるか。差し障りのない範囲で教えていただきましたら幸いです。

千代松　泉佐野市にはこれからやはり多くの海外の方が、今まで以上に訪れてくるというふうに思いますので、漠然とですけれども、やはり泉佐野市の市民はできたらそういう色々な外国から来られた方々に対して、非常におもてなしの心を持って接していく、また海外の方だからといって臆することがないような、そういうようなコミュニケーションをとれるような、そういうようなまち、そういうような人づくりをしていきたいなという風に思っております。

一方で関西国際空港が近いということは、泉佐野市民にとっても非常なアドバンテージであって、ブラジルに行くにしても、36 時間あったら地球の裏側まで行けるという利点がございますので、泉佐野市民が関空を通じて世界各国で様々な活躍ができるような、そういう国際都市を目指していきたいなと考えております。